

河内長野市埋蔵文化財調査報告書XX

高向遺跡

清水遺跡

野作遺跡

膳所藩代官所跡

烏帽子形城跡

2004年3月

河内長野市教育委員会

序 文

大阪府の南東部に位置する河内長野市は、豊かな自然に恵まれ、高野街道に代表される和歌山や奈良へ向う街道の要衝として発展してきた街です。この為市内には数多くの文化財が残されています。

この様な河内長野市も大阪市内への通勤圏に位置しているため住宅都市として発展してきました。この開発がもたらした文化財や自然に対する影響も大きいものがあります。特に、地下に眠る埋蔵文化財は開発と直接に結び付く大きな問題です。

遺跡に託されている河内長野の先人達のメッセージである文化遺産を保護・保存し、更には未来の市民へ伝えていく事は、現代に生きる私達の責務であります。河内長野市に於いては、重要な課題である開発と文化財保護との調和のため、開発に先立ち埋蔵文化財の発掘調査を実施し、その把握に努めています。

本書は発掘調査の成果を収録しています。皆様が先人達のメッセージの一部でもある文化財に対するご理解を深めていただくとともに、文化財の保護・保存・研究するための資料として活用していただければ幸いです。

これらの発掘調査に協力していただきました施主の方々の埋蔵文化財への深いご理解に末尾ながら謝意を表すものです。

平成16年3月

河内長野市教育委員会
教育長 福田弘行

例 言

1. 本書は平成15年の国庫補助事業ほか、河内長野市が実施した遺跡の発掘調査及び遺物整理報告書である。
2. 調査は本市教育委員会教育部社会教育課主幹兼文化財保護係長尾谷雅彦を主担とし、同課文化財保護係鳥羽正剛、藤田徹也(現富田林市教育委員会)を担当者として実施した。
3. 調査及び本書の執筆は鳥羽、藤田が行なった。編集は河内長野市立ふれあい考古館館員松尾和代がこれを補佐した。文責は各文末に記している。
4. 写真撮影は遺構については、鳥羽・藤田、遺物については河内長野市立ふれあい考古館館長中西和子が行なった。
5. 発掘調査及び内業整理については以下の参加を得た。(敬称略)
大塚美幸、大西京子、金行美智子、喜多順子、小浜(箕造)加奈子、齋田菜穂子、末永 剛、杉本祐子、河 延龍、榎本裕子、牟田口京子、安間克己、柳光早欠香
6. 発掘調査については下記の方々のご協力を得た。記して感謝する。(敬称略)
株式会社島田組、国際航業株式会社、芝野真喜雄、芝野正純、中井忠実、中村公正
7. 本調査については、写真・実測図等の記録及びカラースライドを作成した。また出土遺物については市教育委員会が保管し、一部は市立ふれあい考古館で展示している。広く一般の方々に利用されることを希望するものである。

凡 例

1. 本報告書に掲載されている標高はT.P.を基準としている。
2. 土色は、「新版標準土色帖」1990年度版による。
3. 平面測量は国家座標第Ⅵ系による5mメッシュを基準に実施したものである。
4. 図中の北は座標北である。
5. 遺構実測図の縮尺は、1/20・1/30・1/40・1/50・1/100・1/200である。
6. 遺構名は下記の略記号を用いた。
SB……掘立柱建物 SD……溝、区画溝 SI……竪穴住居 SK……土坑
SR……土壇墓 SW……石垣 SY……竈状遺構 NR……自然河川
P……柱穴
7. 遺物実測図の縮尺は、土器1/4、石製品1/4を基準としているが、遺物の状況により変えている。
8. 須恵器・瓦器・瓦質土器・須恵質土器・陶磁器の断面は黒塗り、弥生土器・土師器・土師質土器・石器の断面は白抜き、鉄器の断面は斜線である。
9. 須恵器の編年は田辺昭三氏と中村浩氏の編年を併用した。瓦器境の年代については尾上実氏の「和泉型瓦器境の編年」による。遺物名称は本教育委員会の表記による。
10. 遺物番号と写真図版の番号は一致する。

目 次

序 文	
例 言	
凡 例	
日 次	
挿図目次	
表 目 次	
図版目次	
第1章 調査の状況	1
第2章 調査の結果	5
第1節 高向遺跡 (TKO01-2)	(藤田) 5
1 概略	5
2 調査の方法と基本層序	6
3 遺構と遺物	9
4 まとめ	21
第2節 清水遺跡 (SMZ02-3)	(藤田) 24
1 概略	24
2 調査の方法と層序	24
3 遺構と遺物	24
4 まとめ	26
第3節 野作遺跡 (NSK03-1)	(鳥羽) 28
1 概略	28
2 調査の方法と層序	28
3 遺構と遺物	28
4 まとめ	29
第4節 膳所藩代官所跡 (ZZH03-1)	(鳥羽) 30
1 概略	30
2 調査の方法と層序	30
3 遺構と遺物	31
4 まとめ	31
第5節 烏帽子形城跡 (EBS03-3)	(鳥羽) 32
1 概略	32
2 調査の方法と層序	32
3 遺構と遺物	33
4 まとめ	34

挿 図 目 次

第1図 河内長野市遺跡分布図 (1/40000)	3
高向遺跡 (TKO01-2)	
第2図 調査区位置図 (1/5000)	5
第3図 土層断面柱状図	6
第4図 遺構配置図 (1/200)	7・8
第5図 SB1 遺構実測図 (1/40)	9
第6図 SB2 遺構実測図 (1/40)	10
第7図 SB3・4 遺構実測図 (1/40)	11
第8図 SB5 遺構実測図 (1/40)	12

第9図	S I 1 遺構実測図 (1/40)	13
第10図	S K 1 遺構実測図 (1/40)	13
第11図	S K 2 遺構実測図 (1/40)	13
第12図	S K 3 遺構実測図 (1/40) 及び出土遺物実測図	14
第13図	S K 4 遺構実測図 (1/40)	14
第14図	S K 5 遺構実測図 (1/40) 及び出土遺物実測図	15
第15図	S K 6 遺構実測図 (1/40) 及び出土遺物実測図	15
第16図	S B 6 遺構実測図 (1/40)	16
第17図	S D 1 出土遺物実測図	17
第18図	S D 1 遺構実測図 (1/100)	18
第19図	S R 1 遺構実測図 (1/20)	19
第20図	S R 1 出土遺物実測図	19
第21図	S Y 1 遺構実測図 (1/20)	19
	清水遺跡 (S M Z 02-3)	
第22図	調査区位置図 (1/3000)	24
第23図	遺構配置図 (1/100) 及び土層断面実測図 (1/100)	25
第24図	S B 1 遺構実測図 (1/40) 及びP 1 出土遺物実測図	25
第25図	S D 1 出土遺物実測図	26
	野作遺跡 (N S K 03-1)	
第26図	調査区位置図 (1/3000)	28
第27図	遺構配置図 (1/50) 及び土層断面実測図 (1/50)	29
	膳所藩代官所跡 (Z Z H 03-1)	
第28図	調査区位置図 (1/3000)	30
	烏帽子形城跡 (E B S 03-3)	
第29図	調査区位置図 (1/3000)	32
第30図	遺構配置図 (1/30) 及び土層断面実測図 (1/40)	33
第31図	S D 1・包含層出土遺物実測図	34

表 目 次

第1表	発掘届出件数月別一覧表.....	1
第2表	主な発掘・立会調査一覧表.....	1
第3表	河内長野市遺跡地名表.....	4

図 版 目 次

図版1	遺構 T K O 01-2 調査区全景 (北から)、第1調査区全景 (北から)
図版2	遺構 T K O 01-2 第2調査区全景 (南から)、第3調査区全景 (南から)
図版3	遺構 T K O 01-2 第3調査区全景 (北から)、S B 4・5 (北から)
図版4	遺構 T K O 01-2 S D 1 (西から)、S D 1 (北から)
図版5	遺構 T K O 01-2 遺物出土状況 (西から)、S K 6 (西から)
図版6	遺構 T K O 01-2 S R 1 (東から)、S Y 1 (南から)
図版7	遺構 S M Z 02-3 調査区全景 (東から)、S B 1 (南から)
図版8	遺構 N S K 03-1 調査区全景 (東から)、 E B S 03-3 調査区全景 (東から)
図版9	遺物 T K O 01-2 S K 3 (1~3)、S K 5 (5~9)、S K 6 (10~12)
図版10	遺物 T K O 01-2 S D 1 (13・14)、S R 1 (16)、 S M Z 02-3 S D 1 (19~23)、 E B S 03-3 S D 1 (24~27)、包含層 (28・29)

第1章 調査の状況

平成15年の文化財保護法57条の2および3の発掘届及び発掘通知の件数は、総数109件、そのうち発掘届76件、発掘通知33件である。今年は遺跡範囲拡張に伴う新規発見届及び通知が2件、新規遺跡発見届が1件あった。

今年の発掘届にみられる原因者の状況は、駅前市街地再開発事業やほ場整備など大規模公共事業と共に個人住宅の新築及び改築なども多くあった。

第1表 発掘届出件数月別一覧表（平成15年1月～12月）

	平成14年度			平成15年度									総数
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
発掘届(57条2)	5	5	2	9	2	17	11	10	7	2	3	3	76
発掘通知(57条3)	1	6	0	2	4	4	5	5	1	2	3	0	33
発見届(57条5)	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	2
発見通知(57条6)	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1

第2表 主な発掘・立会調査一覧表（平成15年1月～12月）

遺跡名	調査期間	申請者	申請面積(m ²)	用途	種別	区分	備考
塩谷遺跡	1. 9	国立大阪南病院	13737.70	病院	発掘	原因者	遺構・遺物なし
西高野街道	1.10	関電産業(株)	1016.89	店舗	発掘	原因者	遺構・遺物なし
市町百遺跡	1.15	個人	25.40	集会所	立会	原因者	遺構・遺物なし
清水遺跡	1.14～1.22	個人	205.45	倉庫	発掘	国庫	本書掲載
高野街道	1.21	個人	135.96	個人住宅	発掘	原因者	遺構・遺物なし
高野街道	1.21	富田林上本事務所	135.00	道路	発掘	原因者	遺構・遺物なし
三日月遺跡	1.28	個人	343.81	個人住宅	発掘	原因者	遺構・遺物なし
西高野街道	1.30	山口住宅(株)	463.44	分譲住宅	発掘	原因者	遺構・遺物なし
長野神社遺跡	2. 4～2.21	(宗)長野神社	1400.54	防災施設	発掘	国庫	中世の瓦器・土師質土器・瓦、近世の瓦が出土
尾崎北遺跡	2.18	個人	94.40	個人住宅	立会	原因者	遺構・遺物なし
西高野街道	2.21	個人	466.35	車庫	立会	原因者	遺構・遺物なし
高野街道	2.21	個人	866.29	個人住宅	発掘	原因者	遺構・遺物なし
喜多町遺跡	2.24	個人	486.53	個人住宅	発掘	原因者	遺構・遺物なし
烏帽子形城跡	3.17	(株)成旭	47240.22	管理小屋	発掘	原因者	遺構・遺物なし
高向遺跡	3.22	個人	970.15	店舗	発掘	原因者	奈良時代の須恵器・土師器、鎌倉時代の土師質土器・瓦器が出土
東高野街道	3.22	東尾メック(株)	4.20	エレベーター	立会	原因者	遺構・遺物なし
東高野街道	3.23	個人	171.74	個人住宅	発掘	原因者	遺構・遺物なし
塩谷遺跡	3.24	個人	712.53	個人住宅	発掘	国庫	遺構・遺物なし
塩谷遺跡	3.26	個人	107.39	個人住宅	発掘	原因者	遺構・遺物なし
高野街道・三日月市宿跡・三日月市北遺跡	3.26	西日本電信電話(株)	150.00	電話通信	立会	原因者	遺構・遺物なし
三日月市宿跡・三日月市北遺跡	4.17～10.22	河内長野市	16000.00	再開発事業	発掘	原因者	弥生時代の竪穴住居・建物・溝、近世の溝・土坑を検出。弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・石器が出土

遺跡名	調査期間	申請者	申請面積(㎡)	用途	種別	区分	備考
西之山町遺跡	4.22	富田林十木事務所	700.00	道路	立会	原因者	遺構・遺物なし
岩瀬寺遺跡	4.25	河内長野市	0.25	看板	立会	原因者	遺構・遺物なし
光満寺遺跡	4.25	河内長野市	0.25	看板	立会	原因者	遺構・遺物なし
加賀田神社遺跡	4.25	河内長野市	0.25	看板	立会	原因者	遺構・遺物なし
延命寺遺跡	4.25	河内長野市	0.25	看板	立会	原因者	遺構・遺物なし
長野神社遺跡	4.25	河内長野市	0.25	看板	立会	原因者	遺構・遺物なし
西高野街道	5.6	個人	99.13	個人住宅	発掘	原因者	遺構・遺物なし
西高野街道	5.6	個人	95.19	個人住宅	発掘	原因者	遺構・遺物なし
高野街道	5.12	個人	268.06	個人住宅	発掘	原因者	遺構・遺物なし
高向神社遺跡	5.14	河内長野市	0.7	看板	立会	原因者	遺構・遺物なし
延命寺遺跡	5.14	河内長野市	0.5	看板	立会	原因者	遺構・遺物なし
岩湧寺遺跡	5.14	河内長野市	0.5	看板	立会	原因者	遺構・遺物なし
日野観音寺遺跡	5.14	河内長野市	0.5	看板	立会	原因者	遺構・遺物なし
天神社遺跡	5.14	河内長野市	0.5	看板	立会	原因者	遺構・遺物なし
烏帽子形城跡	5.29	個人	478.58	個人住宅	発掘	国庫	遺構・遺物なし
藁子尻遺跡	6.2	(株)ニッタハウス	785.97	分譲住宅	発掘	原因者	遺構・遺物なし
塩谷遺跡	6.18	個人	111.12	個人住宅	発掘	原因者	遺構・遺物なし
塩谷遺跡	6.19	個人	251.17	個人住宅	発掘	国庫	遺構・遺物なし
市町西遺跡	6.19～6.23	(株)尾崎商店	2464.47	分譲住宅	発掘	原因者	ササカイト遺片・中世の土師貫土器が出土
西代藩陣屋跡	7.4	森本工務店	498.55	分譲住宅	発掘	原因者	遺構・遺物なし
天野山金剛寺遺跡	7.4～8.8	河内長野市	310.69	消防団屯所	発掘	原因者	近世の窯を検出。近世の陶磁器・瓦が出土
長池露跡群	7.9～8.8	河内長野市	22035.28	消防拠点	発掘	原因者	近世の陶磁器が出土
三日月宿跡・三日月北遺跡	7.15～11.28	河内長野市	16000.00	再開発事業	発掘	原因者	弥生時代の竪穴住居・溝、近世の溝・土坑を検出。弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・陶磁器が出土
烏帽子形城跡	7.17～8.8	河内長野市	1610.00	公園	発掘	原因者	遺構・遺物なし
野作遺跡	7.8～7.10	個人	231.41	個人住宅	発掘	国庫	本書掲載
三日月遺跡	8.5	個人	248.44	個人住宅	立会	原因者	遺構・遺物なし
栄町遺跡	8.5	個人	469.16	個人住宅	発掘	原因者	遺構・遺物なし
栄町東遺跡	8.11	個人	228.59	個人住宅	発掘	原因者	遺構・遺物なし
西代藩陣屋跡	8.18	(学)清教学園	3678.71	幼稚園	発掘	原因者	遺構・遺物なし
膳所藩代官所跡	9.8～9.19	個人	370.65	個人住宅	発掘	国庫	本書掲載
莚向遺跡	9.19	個人	237.23	個人住宅	発掘	原因者	遺構・遺物なし
喜多町遺跡	9.19	個人	400.16	個人住宅	立会	原因者	遺構・遺物なし
塩谷遺跡	9.30	個人	200.67	個人住宅	立会	原因者	遺構・遺物なし
天野山金剛寺遺跡	10.7	井トスダレ(株)	248.83	事務所	発掘	原因者	遺構・遺物なし
宮山遺跡	10.9～12.2	河内長野市	2166.27	水道	発掘	原因者	中世の炭焼窯・ピットを検出。中世の瓦器が出土
塩谷遺跡	10.10	個人	170.97	個人住宅	発掘	原因者	遺構・遺物なし
観心寺遺跡	10.15	(社)川上会	1474.19	保育園	発掘	原因者	遺構・遺物なし
長池露跡群	10.22	河内長野市	610.00	下水道	立会	原因者	遺構・遺物なし
三日月遺跡	10.31～12.19	個人	128.58	個人住宅	発掘	原因者	遺構・遺物なし
三日月遺跡	10.31～12.19	個人	127.00	個人住宅	発掘	原因者	遺構・遺物なし
烏帽子形城跡	11.17～11.19	個人	289.71	納屋	発掘	国庫	本書掲載
三日月宿跡	11.18	河内長野市	1787.00	下水道	立会	原因者	遺構・遺物なし
上田町窯跡	11.18	河内長野市	461.40	下水道	立会	原因者	遺構・遺物なし
喜多町遺跡	11.18	河内長野市	368.80	下水道	立会	原因者	遺構・遺物なし
大日寺遺跡	11.18	河内長野市	498.60	下水道	立会	原因者	遺構・遺物なし
烏帽子形城跡	11.18	河内長野市	167.31	下水道	立会	原因者	遺構・遺物なし
向野遺跡	11.19	河内長野市	339.80	下水道	立会	原因者	遺構・遺物なし
藁子尻遺跡	12.9	個人	227.99	テナントビル	発掘	原因者	遺構・遺物なし



第1圖 河内長野市遺跡分布図(1/40000)

番号	文化財名称	種類	時代
1	長野神社遺跡	社寺	室町以降
2	河合寺遺跡	社寺	平安以降
3	観心寺遺跡	社寺	平安以降
4	大郎山古墳	古墳(前期)	古墳(前期)
5	大郎山古墳	古墳(後期)	古墳(後期)
6	大郎山遺跡	集落・生産	弥生(後期)・平安
7	興福寺遺跡	社寺	中世以降
8	高野子形八幡神社遺跡	社寺	室町以降
9	塚穴古墳	古墳(後期)・近世	古墳(後期)
10	長池遺跡	生産	平安～近世
11	小山田1号古墳	墳墓	奈良
12	小山田2号古墳	墳墓	奈良
13	延命寺遺跡	社寺	平安以降
14	天野山金剛寺遺跡	社寺・墳墓	平安以降
15	日野観音寺遺跡	社寺・生産	平安～中世
16	地蔵寺遺跡	社寺	中世以降
(17)	野湧寺遺跡	社寺	平安以降
18	五ノ木古墳	古墳	古墳(後期)
19	高向遺跡	集落	旧石器～中世
20	藤井子形遺跡	集落・生産	中世～近世
21	喜多形遺跡	集落	縄文・古墳～中世
22	鳥籠子形古墳	古墳	古墳(後期)
23	末広遺跡	生産	中世
24	塚谷遺跡	教育地	縄文～近世
25	流谷八幡神社	社寺	平安以降
26	蟹井南遺跡	散布地	中世
27	蟹井北遺跡	散布地	中世
28	大見沢北遺跡	散布地	中世
29	千早口駅前遺跡	社寺	中世
30	岩瀬弥勒寺遺跡	社寺	中世以降
31	清水遺跡	散布地	中世
32	伝「仲水廟」古墳	古墳?	
(33)	堂村地蔵堂跡	社寺	近世
(34)	酒畑遺跡	墳墓	近世
(35)	中村阿弥陀堂跡	社寺	近世
(36)	東の村阿弥陀堂跡	社寺	近世
(37)	西の村阿弥陀堂跡	社寺	近世
(38)	清水阿弥陀堂跡	社寺	近世
(39)	滝尻弥勒堂跡	社寺	近世
(40)	宮山遺跡	集落	古墳
41	宮山古墳	古墳	古墳
42	宮山遺跡	集落	縄文・奈良
43	西代澤原原址	散布地・城跡	飛鳥～奈良・江戸
44	上原町墓地	墳墓	近世
45	懸持寺跡	散布地・社寺	縄文・奈良・鎌倉
46	栗山遺跡	宗廟	中世～近世
47	寺ヶ池遺跡	散布地	縄文
48	上原遺跡	散布地	旧石器～近世
49	生吉神社遺跡	社寺	古墳以降
50	高野神社遺跡	社寺	中世以降
51	青が原神社遺跡	社寺	中世以降
52	藤原雷代宮所跡	城跡	江戸
53	双下塚古墳	古墳	古墳
54	善子風遺跡	散布地・社寺	縄文～近世
55	阿合寺城跡	城跡	中世
56	三日古遺跡	集落・古墳	旧石器～近世
57	日之谷遺跡	城跡	中世
58	高木遺跡	散布地	縄文
59	河津の山城跡	城跡	中世
60	峠山山城跡	城跡	中世
61	柿崎山城跡	城跡	中世
62	河見城跡	城跡	中世
63	坂蔵城跡	城跡	中世
64	梅現城跡	城跡	中世
(65)	天神社遺跡	社寺	中世以降
(66)	葛城第15経塚	経塚	平安以降
(67)	加賀田神社遺跡	社寺	中世以降
68	庚申堂遺跡	社寺	近世以降
69	石弘城跡	城跡	中世
70	佐近城跡	城跡	中世
71	佐尾城跡	城跡	中世
72	葛城第16経塚	経塚	平安以降
(73)	葛城第18経塚	経塚	平安以降

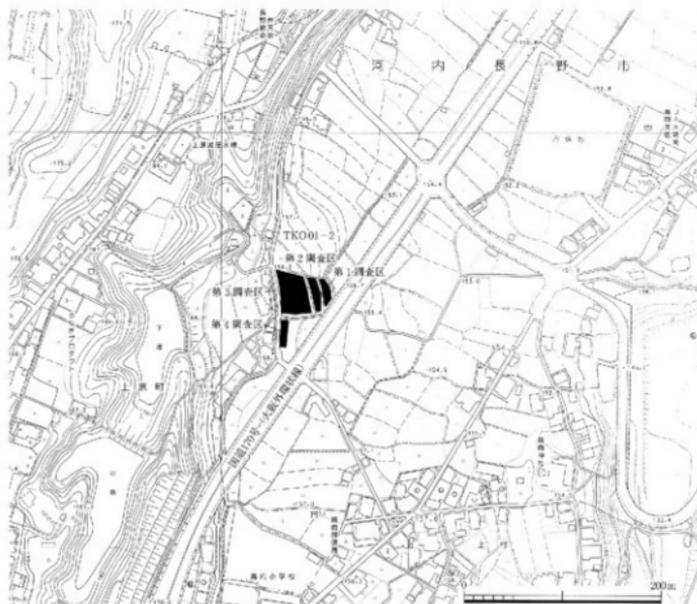
番号	文化財名称	種類	時代
(74)	葛城第19経塚	経塚	平安以降
(75)	藤尾集落	城跡	中世
(76)	大沢集落	城跡	中世
(77)	二岡山経塚	経塚	平安以降
(78)	尤魂寺遺跡	社寺	平安以降
(79)	讀子城跡	城跡	中世
80	蟹井南神社遺跡	社寺	中世以降
(81)	川上神社遺跡	社寺	中世以降
82	千代田神社遺跡	社寺	中世以降
83	向野遺跡	集落・生産	縄文・平安～近世
84	吉野町遺跡	城跡	中世
85	上原北遺跡	集落	中世
86	人日寺遺跡	社寺(古墳・墳墓)	弥生～近世
87	高向遺跡	散布地	鎌倉
88	小塩遺跡	集落	縄文～奈良
89	加塩遺跡	集落	古墳(後期)
90	尾崎遺跡	城跡?	中世
91	ジャウマニ遺跡	城跡?	中世
92	仁王山城跡	城跡	中世
93	夕之ヶ城跡	城跡	中世
94	岩立城跡	城跡	中世
95	上原近世丸遺跡	生産	近世
96	市町町遺跡	散布地	弥生・中世
97	上山町遺跡	集落	近世
98	尾崎北遺跡	集落	古墳～中世
99	西之山町遺跡	散布地	中世
100	野原里遺跡	集落	平安
101	鳩尾遺跡	散布地	中世
102	上山町遺跡	散布地	古墳・中世
103	上原中遺跡	散布地	古墳・中世
104	小野塚遺跡	墳墓	中世
(105)	葛城第17経塚	経塚	平安以降
106	野井遺跡	社寺	中世以降
107	野村遺跡	生産	中世
108	寺元遺跡	集落・社寺	縄文・奈良・中世
(109)	鳩原遺跡	散布地	中世
110	法師原古墳	古墳	古墳
111	山上塚山古墳	古墳	古墳
112	西浦遺跡	集落	古墳・中世・近世
113	池瀬寺跡	社寺	近世
114	宮の下遺跡	集落	平安～中世
115	赤町遺跡	散布地	弥生・古墳・中世
116	鶴町遺跡	散布地	中世
(117)	北井遺跡	散布地	縄文・中世
118	鶴町北遺跡	集落	弥生・中世
119	市町西遺跡	集落	縄文・中世
120	栗町南遺跡	集落	中世
121	栗町東遺跡	散布地	弥生・中世
122	鳩町東遺跡	散布地	弥生
123	夕の宮町遺跡	散布地	弥生・奈良
124	夕の宮町遺跡	散布地	中世
125	神方丘近世墓	墳墓	近世
126	地蔵寺	社寺	中世以降
127	二城城遺跡	城跡	中世・近世
128	松林寺遺跡	社寺	近世以降
129	嶋堂町遺跡	散布地	中世
*130	東高野街道	街道	平安以降
*131	西高野街道	街道	平安以降
*132	高野街道	街道	平安以降
133	上原東遺跡	散布地	弥生・中世
134	地蔵寺東方遺跡	散布地・墳墓	弥生・鎌倉
135	本多町北遺跡	散布地	中世
136	下里町遺跡	散布地	古墳・中世
137	あかしあひ遺跡	散布地	近世
138	岩瀬北遺跡	集落	中世
139	岩瀬近世墓地	墳墓	近世
140	昭栄町東渡跡	散布地・池跡	縄文・中世・近世
141	二日市北遺跡	集落	弥生～中世
142	三日市遺跡	集落	中世～近世
143	上田町遺跡	宗廟(伊弉諾)	中世～近世
144	滝尻遺跡	散布地	縄文・古墳・中世
145	市町北遺跡	散布地	中世

() は地図図開外 * は街道につき地図上にプロットせず

第3表 河内長野市遺跡地名表

第2章 調査の結果

第1節 高向遺跡(TK001-2)



第2図 調査区位置図(1/5000)

1 概略

高向遺跡は、河内長野市高向、上原町に所在し、石川左岸の中位段丘上に位置する。石川左岸の中位段丘は、南西から北東方向に向かって緩やかに標高を下げ、富田林市へと続く。遺跡は、石川左岸中位段丘の最南端の遺跡であり、本次調査区は高向遺跡の南西端にあたる。遺跡の東側は、比高差約10mの段丘崖があり、低位段丘に至る。西側の高位段丘上には開折谷が形成されている。

遺跡周辺は、隆起が激しい市域にあって緩やかな平坦面が続く生活環境に適した地域であり、現在でも条理地割が良好に残る。近年では、大阪外環状線(国道170号)の開通に伴い、開発が進み徐々にその姿が失われつつある。

これまで高向遺跡は十数次にわたる調査がなされ、縄文時代から中世までの複合遺跡で

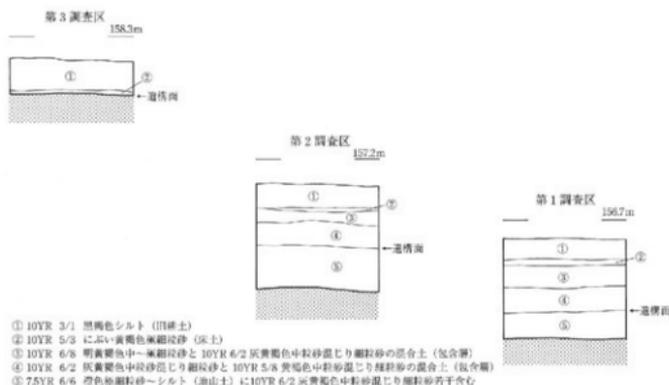
あることが確認されている。しかし、集落として明確な痕跡があるのは、本次調査区で確認できた古墳時代中期以降であり、縄文時代や弥生時代の遺物は散見できるものの遺構の検出には至っていない。

本次調査は、老人福祉施設建築工事に先立ち実施した。調査区は建物の基礎工事によって影響を受ける範囲、約2000㎡について設定した。

2 調査の方法と基本層序

本次調査区は、西側から東側に向かって緩やかに傾斜している。調査地区は、調査以前、水田として利用されており、傾斜にあわせ段が構成されており、段の境界には石組みの用水路が設置されていた。試掘調査の深度から、用水路によって遺構面が破壊されていることが確実なため、用水路を調査時の排水溝として利用し、各段ごとに第1～第3調査区に分けた。なお、最上段の南側にも調査区を設け、第4調査区としたが、担当者の不注意により機械掘削において遺構面を削り取ってしまった。よって、今回の報告は成果の得られた第3調査区までとした。

層序は基本的に各調査区ともに耕土、床土、包含層、遺構面、地山となる。第3調査区のおおよそ東側半分までは、地山の上に堆積している面で遺構を検出し、西側半分は、地山面で検出している。なお、調査終了後、第1調査区は全面、それ以外の調査区においてはトレンチを設定し、地山面まで掘削し確認したが、遺構・遺物の検出はできなかった。なお、水田の各段境には、用水路が走っており、その用水路については掘削をせず、調査の排水溝として利用した。



第3図 土層断面柱状図



第4図 遺構配置図(1/200)

3 遺構と遺物

本次調査区では、出土遺物から大きく古墳時代と中世のものに分けられる。以下、時代ごとの主要な遺構、遺物について成果を概観する。

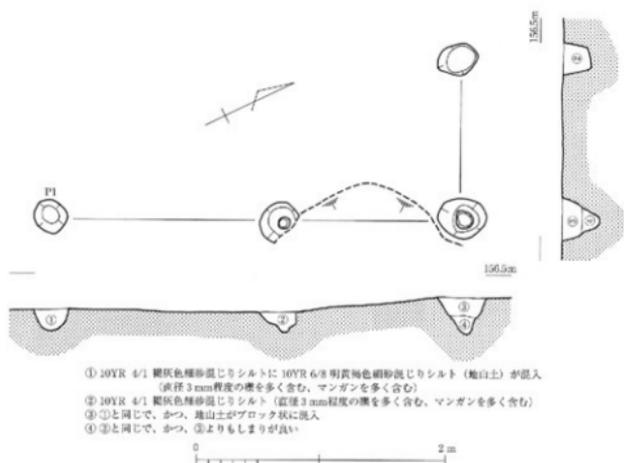
・古墳時代

(1) 掘立柱建物

〔SB1〕(第5図)

第1調査区南側で検出した。ほとんどが調査区外になると考えられ、建物の規模は不明である。柱穴間の距離は、約1.3~1.9mである。それぞれのピットの最終的に埋まった土は10YR 4/1 褐灰色細粒砂混じりのシルトであり、同時期性は断面の観察からも強いと考えられる。

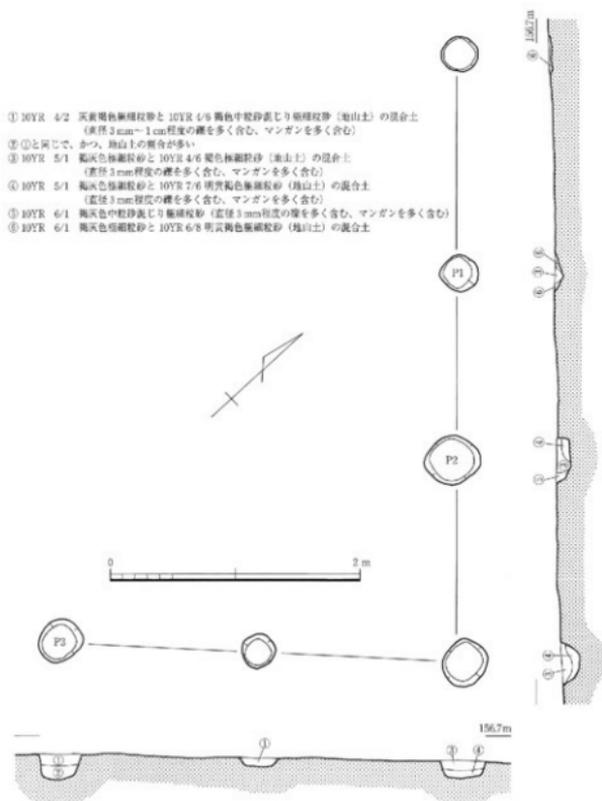
実測可能な遺物がなく、時期の特定もできないが、本次調査区で検出したほかの遺構埋土の特徴から、古墳時代中期末~後期にかけての所産と考えられる。P1から土師器片と須恵器片が出土しているが、細片のため実測できなかった。



第5図 SB1遺構実測図(1/40)

〔SB2〕(第6図)

第2調査区南側で検出した。現存する遺構から建物規模2間×3間以上が想定できるが一部調査区外に及ぶ。また、南西側の柱穴、すなわちP1・2に対応するであろう柱穴は後世の削平を受けたため検出できなかった。従って、P3よりさらに南西側に柱穴が続く可能性が高い。柱間は約1.7mである。遺物は出土していないが、断面の観察などから古墳時代のものであると考えられる。



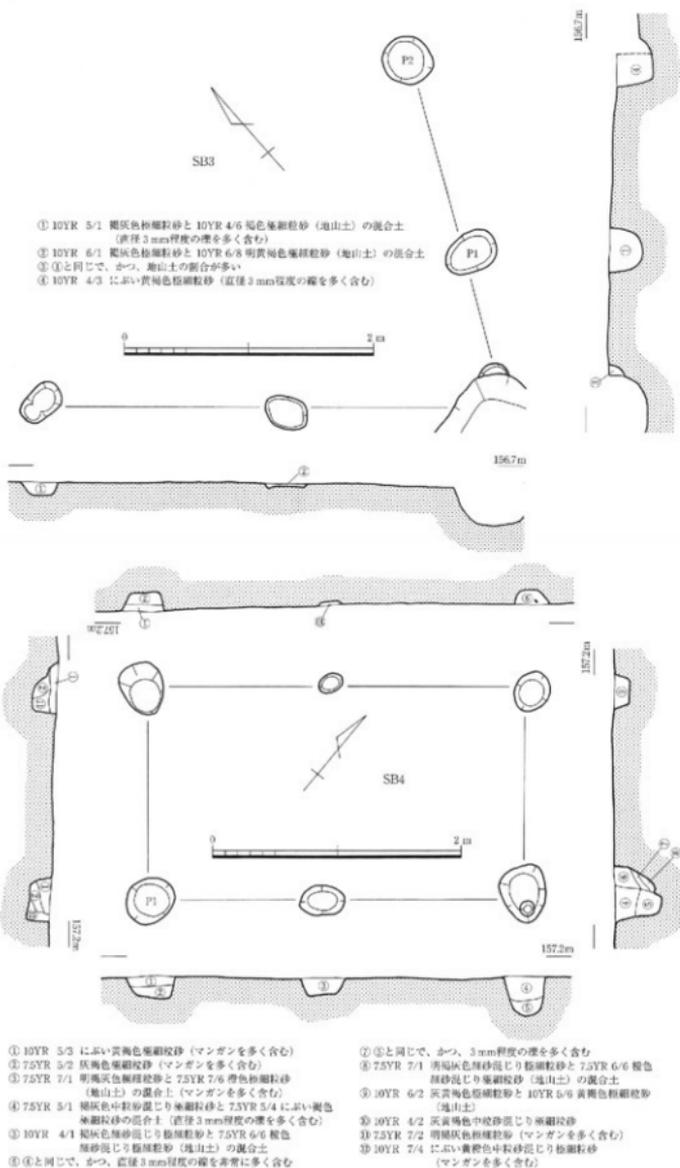
第6図 SB 2 遺構実測図(1/40)

[SB 3] (第7図)

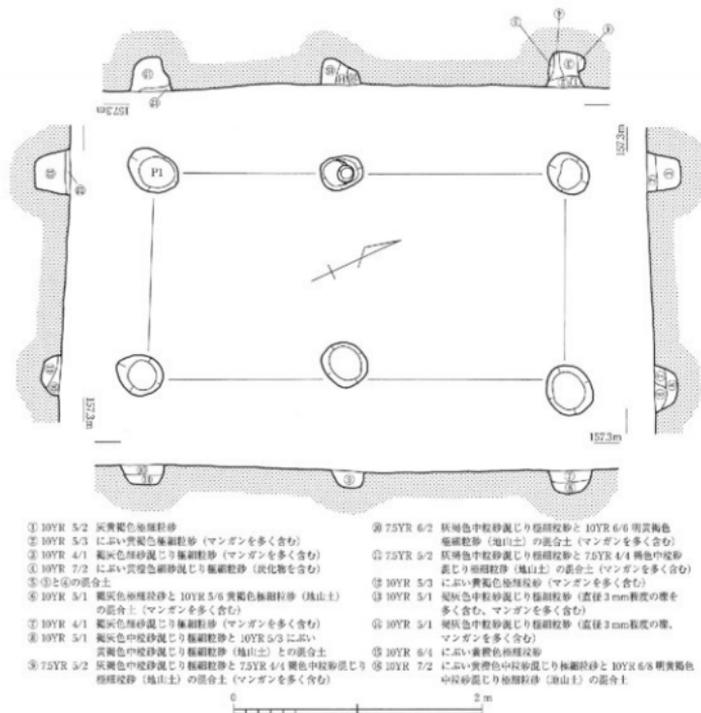
SB 3は、第2調査区SB 2の北東側に位置する。北西角に位置するであろう柱穴の検出はできなかった。復元できる建物規模としては、2間×2間を想定できる。柱間は約1.6～2.0mである。P 1・2からそれぞれ土師器片と須恵器片が出土しているが、いずれも細片のため図示する事ができなかった。所属時期としては古墳時代のものと考えられる。

[SB 4] (第7図、図版3)

第3調査区南東側で検出した。全体的な規模としては1間×2間に復元できるが、周辺に多数のピットを検出したため、規模が大きくなる可能性もある。現状の柱間は約1.7mである。



第7図 SB3・4遺構実測図(1/40)



第8図 SB 5 遺構実測図(1/40)

P 1 から土師器と須恵器が出土しているが、いずれも細片のため図示できなかった。

[SB 5] (第8図、図版3)

SB 4 の北側で検出した。全体的な規模としては、1間×2間に復元できるが、SB 4 と同様、周辺には多数ピットがあるので、さらに規模が大きくなる可能性がある。柱間は約1.7mである。

P 1 から土師器が出土しているが、細片のため図示できなかった。

(2) 堅穴住居

[S 1 1] (第9図)

第1調査区SB 1の北側で検出した。後世の削平を受け一部しか検出できなかった。検出した深さは0.05mであり、遺構中央部に向かって深くなる。遺構埋土は1層であり、10 YR 6/1 褐色色極細粒砂であった。壁溝などの確認もできなかった。以上の知見からは堅穴住居であるとの断言は出来ないが、ほぼ90度に近い曲がりの掘方をもつ比較規模の大

きい遺構であることから、堅穴住居である可能性を指摘しておきたい。

遺物は出土しなかった。

(3) 土坑

〔SK 1〕(第10図)

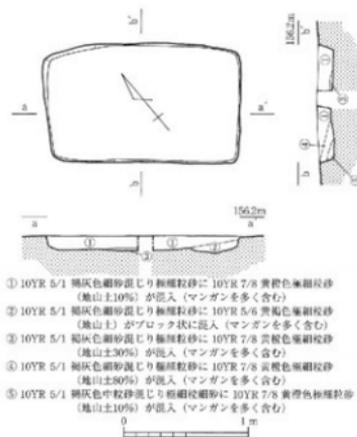
第1調査区の東側で検出した。平面形1.6m×1m、深さ0.14mの長方形をした土坑である。埋土全体に炭化物を多く含んでいることなどから、何かを燃やした遺構や、木棺などの可能性も考えられるが、平面・断面の観察ともに積極的に何らかの性格を示すものは得られなかった。①層の埋土が、古墳時代の須恵器を包含する他の遺構埋土と同様であり、須恵器片が出土していることから所属時代は古墳時代のものと考えられるが、性格は不明である。

遺物は、細片のため図示できなかった。

〔SK 2〕(第11図)

第1調査区南東側で検出した。平面形は不定形で、長軸1.17m、短軸1.03m、深さ約0.3mであった。①層の低部に炭化物を多く含むのが特徴的であるが、SK 1と同様、その性格は不明である。

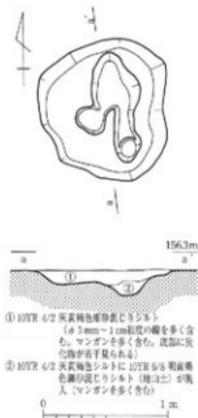
出土遺物として土師器、須恵器が挙げられるが、細片のため図示できなかった。



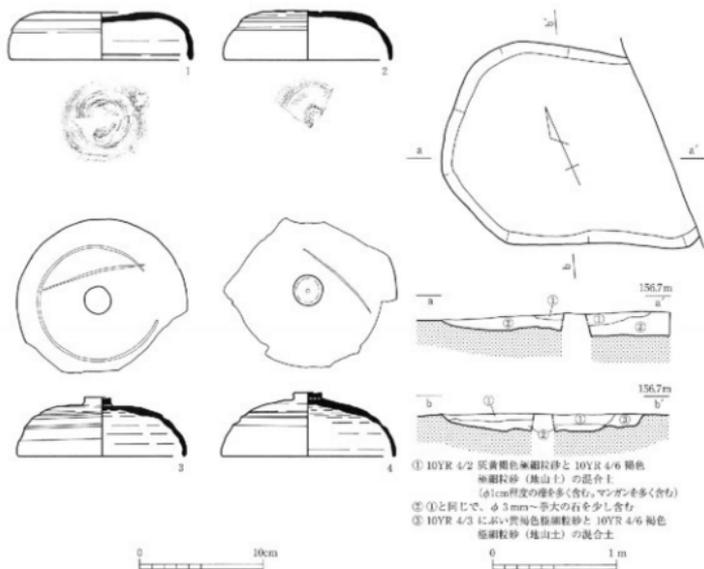
第10図 SK 1 遺構実測図(1/40)



第9図 SK 1 遺構実測図(1/40)



第11図 SK 2 遺構実測図(1/40)



第12図 SK 3 遺構実測図(1/40)及び出土遺物実測図

〔SK 3〕(第12図、図版9)

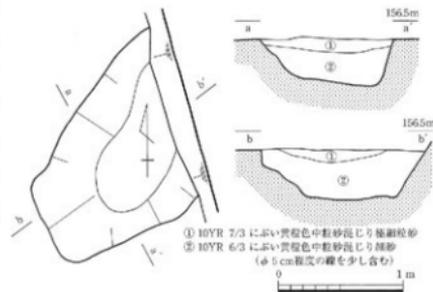
第2調査区南東隅で検出した。一部は調査区外であり全体の規模は不明である。検出規模は長軸1.8m、短軸約1.6m、深さ約0.2mである。

出土遺物は須恵器の蓋坏の蓋(1・2)と高坏の蓋(3・4)である。いずれも②層から出土しており、遺構の底付近からの出土であることから、一括資料として捉えられる。

〔SK 4〕(第13図)

第2調査区中央東側で検出した。一部調査区外になるため、全体の規模は不明だが、検出した規模は長軸1.5m、短軸1.2mで、深さは約0.4mを測る。

遺物は、須恵器、瓦器などがあるが、細片のため図示できなかった。後述するように、この周辺は自然河川の氾濫を受けており、瓦器はその時に混入したものであると考えられる。

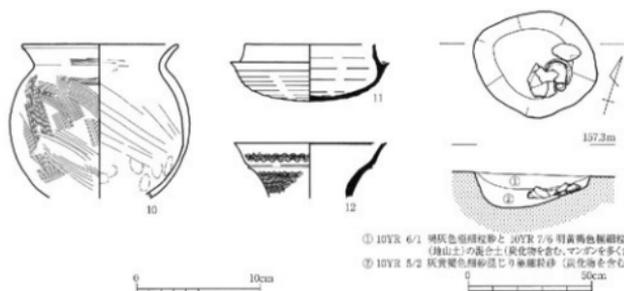


第13図 SK 4 遺構実測図(1/40)



- ① 75YR 5/1 紫灰色中粒砂混じり粘粉砂と 75YR 6/6 橙赤中粒砂混じり無磁鉄砂(焼山上)の混合土 (φ1cm程度の礫を多く含む)
 ② 75YR 6/2 灰褐色無磁鉄砂混じりシルトと 75YR 6/6 橙赤無磁鉄砂混じりシルト(焼山上)の混合土

第14図 SK 5 遺構実測図(1/40)及び出土遺物実測図



- ① 10YR 6/1 黄灰色粗粒砂と 10YR 7/6 明黄褐色無磁鉄砂(焼山上)の混合土(炭化物を含む、マンガンも多く含む)
 ② 10YR 5/2 灰黄褐色粗粒砂混じり無磁鉄砂(灰化物を含む)

第15図 SK 6 遺構実測図(1/40)及び出土遺物実測図

〔SK 5〕(第14図、図版9)

第3調査区南東側で検出した。この遺構も一部調査区外になるため、全体の規模は不明である。検出した規模は長軸約2.3m、短軸約1.1mで、深さは約0.2mであった。

遺物は須恵器の高坏の脚部・坏蓋の他、たたき石(9)やサヌカイト剥片も出土している。

〔SK 6〕(第15図、図版5・9)

第3調査区中央東側で検出した。規模は長軸0.52m、短軸0.44mで楕円形をなす。深さは0.14mであった。

②層のはほぼ底面に近いところで須恵器の坏(11)が完形に近い状態で出土している。他に、土師器の甕(10)、須恵器の罎(12)が出土している。

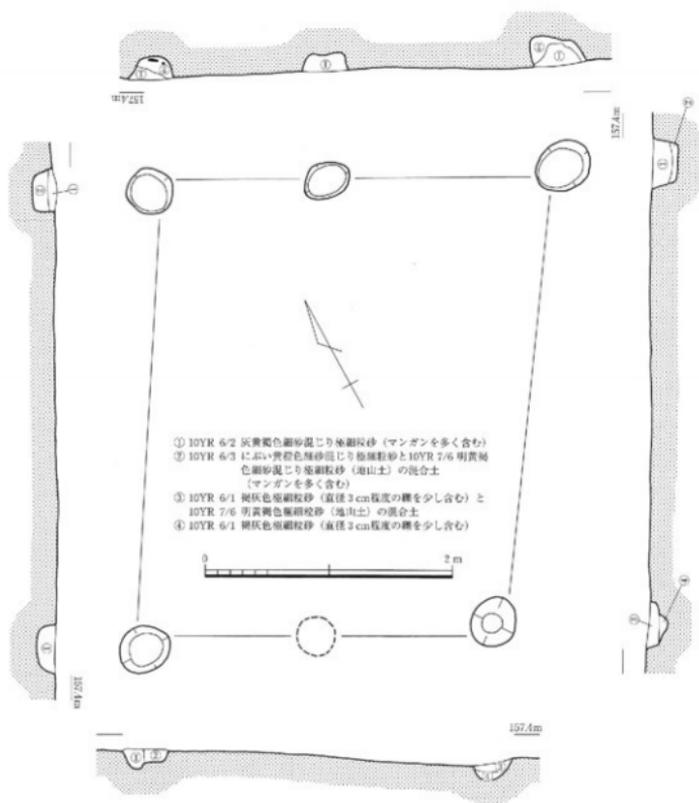
・中世

(1) 掘立柱建物

[S B 6] (第16図)

第3調査区南側で検出した。後述する自然河川の氾濫のため、一部削平されているものと考えられ、調査区外に範囲が拡大する可能性もある。現状の規模としては、2間×1間を想定できるが、柱穴の間隔から本来は2間×2間以上であった可能性もある。

図示できる遺物はないが、出土している瓦器境片の状態から尾上編年のⅢ期のものであり、年代としては13世紀代と考えられる。



第16図 S B 6 遺構実測図(1/40)

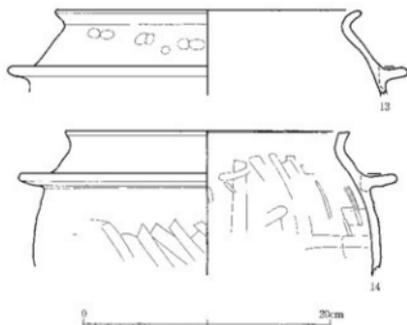
(2) 用水施設

[SD1] (第17・18図、図版4・10)

第3調査区の北西側で検出した。幅約4m、長さ約16.2mで調査区外へ延びる。⑨層下に小枝を敷き詰めた筵状の構築物が6mほど続く。両側は、緩やかに立ち上がり筒状になっている。立ち上がり部分は、下部に土をかませることで安定化をはかっており、人工的な構築物であることは疑いない。溝の最下層は、流水の痕跡が見られるが、その上層にベース土と粘質性の強い土がブロック状に堆積し、当初、人工的な溝として造られた後、人為的に埋められ、その上に筵状の構築物が設けられたと考えられる。

小枝を敷き詰められた筵状遺構が切れた箇所から約0.3m北側には、筵状遺構の方向と交差する角度で、松の木が置かれ、言わば南西方向から流れる水を堰きとめる形となっている。松の木を取り外すと、下には小枝が格子状に多数散在していた。その間には粘性の強い土が詰まった状態で確認できた。また、松の木が位置する南側の掘方は、それまでの傾斜とは異なり平坦になる。この平坦面が、一種の作業場であると考えられるならば、松の木が取り外し可能な水路の開閉装置であると考えられることも可能である。しかし、松の木を取り外し、水が流れた場合、先述した格子状に組まれた小枝は流れてしまう。松の木が開閉装置であった場合、その下にある小枝は流れて堆積しただけの可能性もある。また、松の木が意図的に置かれている根拠も、掘方が平坦面をなすという点だけであるので、積極的な機能を言及するのはさけるが、松の木やその下の小枝もこの箇所であって溜まってしまっただけの理由が溝の北東側にあった事は確かであり、この付近で、一旦水を堰きとめるための装置と堰きとめるための理由があったと考えられる。

遺物は、土師質の土釜(13・14)が出土した。



第17図 SD1出土遺物実測図

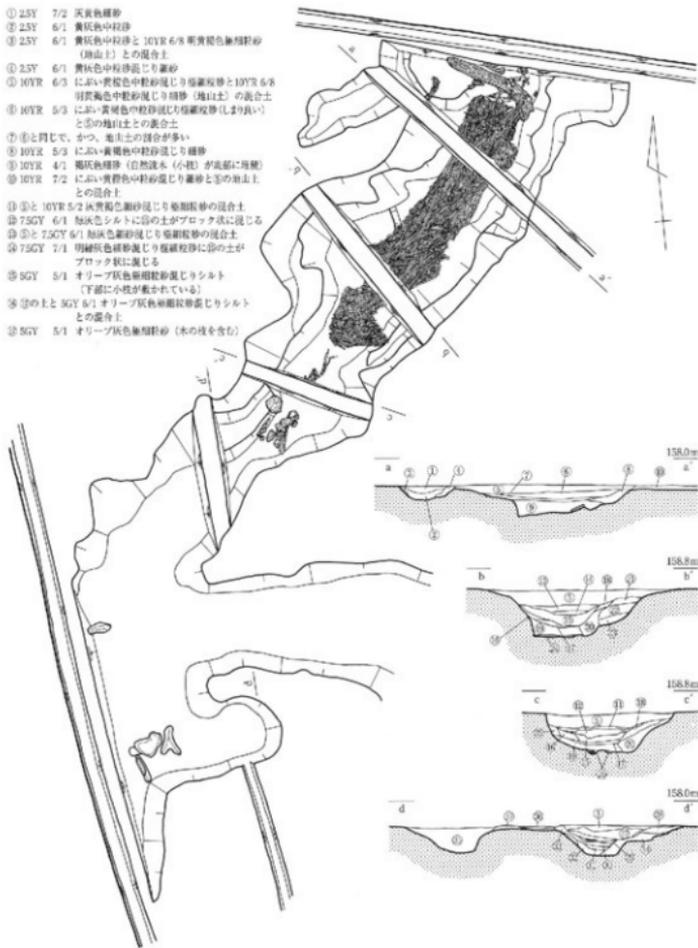
(3) 土壙墓

[SR1] (第19・20図、図版6・10)

第3調査区SB6の約5m西側に位置する。遺構の南側掘方は一部隣接する遺構に破壊を受けている。遺構の底には白色の砂(細粒砂~中粒砂)が敷かれたような状況で堆積しており、砂の上部から拳大の礫とともに瓦器塊(16)がほぼ完形で置かれていた。また、砂上部や砂の中には木片が多量に検出された。釘は出土していないが、断面にも木片状の立ち

高向遺跡

- ① 25Y 7/2 灰黄色細砂
- ② 25Y 6/1 黄灰色中粒砂
- ③ 25Y 6/1 黄灰色中粒砂と 10YR 6/8 明黄褐色細粒砂 (堆山土) との混合土
- ④ 25Y 6/1 黄灰色中粒砂混じり細砂
- ⑤ 10YR 6/3 におい黄褐色中粒砂混じり極細粒砂と 10YR 6/8 明黄褐色中粒砂混じり極細 (堆山土) の混合土
- ⑥ 10YR 5/3 におい黄褐色中粒砂混じり極細粒砂(しまり高い) と⑤の堆山土との混合土
- ⑦ ⑥と同じで、かつ、堆山土の割合が多い
- ⑧ 10YR 5/3 におい黄褐色中粒砂混じり細砂
- ⑨ 10YR 4/1 黄褐色細砂 (自然流木 (小枝) が表面に埋蔵)
- ⑩ 10YR 7/2 におい黄褐色中粒砂混じり細砂と⑨の堆山土との混合土
- ⑪ ⑩と 10YR 5/2 灰黄褐色細砂混じり極細粒砂の混合土
- ⑫ 75GY 6/1 灰黄色シルトに⑩の土がブロック状に混じる
- ⑬ ⑫と 75GY 6/1 灰黄色細砂混じり極細粒砂の混合土
- ⑭ 75GY 7/1 明緑褐色細砂混じり極細粒砂に⑩の土がブロック状に混じる
- ⑮ 5GY 5/1 オリーブ灰色極細粒砂混じりシルト (下部に小枝が散かかっている)
- ⑯ ⑮の上と 5GY 6/1 オリーブ灰色極細粒砂混じりシルトとの混合土
- ⑰ 5GY 5/1 オリーブ灰色極細粒砂 (木の枝を含む)

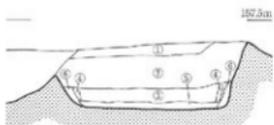


- ⑱ 25GY 5/1 オリーブ灰色極細粒砂混じりシルト
- ⑲ 75GY 6/1 緑灰色細砂混じり中粒砂
- ⑳ 25GY 6/1 オリーブ灰色細粒砂
- ㉑ 10YR 6/1 黄褐色細粒砂
- ㉒ 75GY 7/1 明緑褐色細粒砂と⑬の土との混合土
- ㉓ 75GY 6/1 緑灰色細砂混じり極細粒砂
- ㉔ 75GY 6/1 緑灰色中粒砂
- ㉕ 5GY 6/1 オリーブ灰色シルト
- ㉖ ⑬の上と⑱ 5cmの層を含む
- ㉗ 10YR 6/2 黄褐色細粒砂と 10YR 6/2 灰白色細砂の混合土 (自然流木を含む)

- ㉘ 10YR 6/1 黄褐色中粒砂と⑩の堆山土との混合土
- ㉙ 25GY 7/1 暗オリーブ灰色中粒砂混じり細砂
- ㉚ 25GY 6/1 オリーブ灰色中粒砂 (直径1cm程度の塊を多く含む)
- ㉛ 25GY 6/1 オリーブ灰色中粒砂混じり極細粒砂
- ㉜ 25GY 6/1 オリーブ灰色中粒砂
- ㉝ 10YR 5/1 黄褐色細砂混じり極細粒砂
- ㉞ 10YR 5/1 黄褐色細粒砂 (直径1cm程度の塊を少し含む)
- ㉟ 75GY 7/1 明緑褐色中粒砂と 10YR 6/8 明黄褐色中粒砂の混合土 (樹木の葉や草茎に多く含む)
- ㊱ 10YR 7/8 黄褐色中粒砂と 10YR 6/1 灰白色中粒砂の混合土
- ㊲ 10YR 7/8 黄褐色中粒砂



第18図 SD1遺構実測図(1/100)



- ① ②と10YR 7/2 に近い黄褐色中粒砂質じり焼土の混合土（マンガンを多く含む）
- ③ 10YR 5/1 褐色中粒砂質じり焼土（約3mm程度の層を多く含む、マンガンを多く含む）
- ④ 10YR 6/2 灰黄色細粒砂質じり焼土に10YR 2.5/6 明褐色細粒焼土にプロック状に混入
- ⑤ 10YR 3/1 黄褐色シルト～粘土（木片が混入したものと思われる）に10YR 6/2 灰黄色細粒砂質じり焼土
- ⑥ 10YR 7/1 灰白色粗粒～細粒砂に10YR 5/2 灰黄色細粒焼土と10YR 6/9 黄褐色細粒砂質じり焼土が若干混入
- ⑦ 10YR 6/2 灰黄色細粒砂質じり焼土に10YR 4/4 褐色細粒砂質プロック状に混入

第19図 SR1 遺構実測図(1/20)

上がりがみられ、木棺墓の可能性が高い。

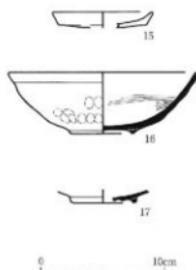
白砂が木棺の内部であるか外部であるかの判断は難しいが、断面状に見られる木片の痕跡が白砂上部から立ち上ることから、墓坑を掘削し、白砂を敷いた後に木棺を正置したものと考えた。

出土遺物は、土師質皿(15)、瓦器碗(16・17)がある。他に瓦質甕が出土している。図ができなかったものを含めると、瓦器碗は少なくとも2個体以上あり、それと瓦質製品という構成になる。

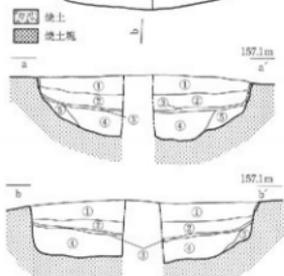
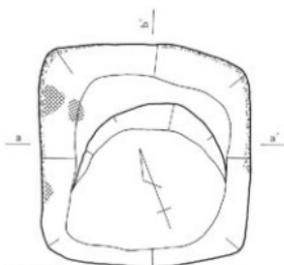
(4) 窯状遺構

[SY1] (第21図、図版6)

第3調査区南東側で検出した。掘方のおよ3分の2の範囲に焼土壁が周る。焼土壁の厚さは約3cm程度で土色は2.5YR 5/6 明褐色である。検出面から15cmほど掘り下げたところでほぼ一面が炭で覆われた層を検出できた。ただし、遺構最



第20図 SR1 出土遺物実測図



- ① 10YR 3/2 黒褐色シルト～細粒砂と10YR 4/1 灰褐色シルト～細粒砂(20%)（若干中粒砂～百静土に混入）
- ② 10YR 4/1 褐色細粒砂質じり焼土（灰化物、焼土塊含む）
- ③ 灰化物層（10YR 2/1 黒色）
- ④ 10YR 5/2 灰黄色シルト～細粒砂と10YR 6/9 明褐色シルト～極細粒砂（30%）、灰化物が少量混入
- ⑤ ④と同じだが、10YR 6/9 明褐色シルト～細粒砂の比率が多く、しまりが強い



第21図 SY1 遺構実測図(1/20)

終面は、さらに20cmほど掘り下げたところで、遺構ベース土を検出した。したがって、燃焼をおこなったのは、③層下であることが想定できるが、遺構の掘方が更に20cmほど下がるのは、不明である。

出土遺物には須恵器や石器なども含まれているが、①層に自然河川が氾濫した時に混入したと考えられる砂質の埋土が含まれており、瓦器境が出土していることから、この遺構の所属時期は中世段階であると考えられる。

(5) 自然河川

[NR1]

第3調査区西側から緩やかに蛇行しながら東側に傾斜し第2調査区へと続く。第1調査区では、検出できなかったが、第1調査区の北側が遺構面上面にこの自然河川の氾濫と考えられる層が薄く堆積しており、本来はさらに東側へ続いたと考えられる。遺構埋土の上層は10cm以上の礫が多く含まれ、断面では流水の観察はできなかった。時期の特定はできないが、第3調査区の一部に見られる近世に構築された暗渠に切られているので、近世頃に人為的に埋められた可能性が考えられる。また、NR2同様、地形の斜面が緩やかになるあたりから、深さが浅くなる。そのため、河川周辺の遺構面や遺構埋土の上層に砂質の土が堆積している。砂質の上が古墳時代の須恵器を伴う遺構には含まれないことから、NR1は、中世以降のものであると考えられる。

[NR2]

NR1と同様、第3調査区西側から流れるが、第3調査区南東側でとぎれる。とぎれた周辺から、遺構面の上面に1層覆う形で砂質土が形成されていることから、途中で放水したものと捉えることが出来る。この砂質土を取り除いた下から、中世の上坑や掘立柱建物を検出した。このことから、放水は尾上編年のⅢ期以降であり、また自然河川の方を考えると掘立柱建物が建てられた頃は、まだ存在していなかったと考えられる。

出土遺物

SK3出土の(3・4)は、須恵器高杯の蓋である。やや丸みを帯びた天井部の中央にわずかな凹みをもつつまみが付く。(3)は、天井端部に沈線が巡り稜を形成しているが、(4)は、全体的に回転ナデで調整されている。稜は、天井部から口縁にかけてのカーブの中でわずかに想定できる程度でしかない。口縁端部はやや外反するものの、内傾する明瞭な段はなく、丸みを帯びている。

SK3出土の(1・2)は須恵器蓋杯の蓋である。天井部は平坦で、わずかにヘラ削りがみられるものの、その範囲は極めて限定されている。(2)は、沈線をめぐらし稜を形成しているが、(1)には、その形跡はみられない。(2)の口縁端部は内傾するが、(1)は丸く仕上げられている。

SK 5 出土の(5)は、須恵器の坏壺である。天井部はやや丸みを帯びた平坦をなす。口縁部はわずかに外反気味であるが、ほぼ直下に下り、端部は平面である。

SK 5 出土の(6・7)は須恵器の坏身である。口縁はやや内傾しながらちあがり、高さは器高の1/2ほどである。口縁端部は丸く仕上げられており、(6)の底部は平坦で安定している。

SK 5 出土の(8)は、須恵器の甕である。口頸部は、緩やかに外反し上方外にのび、頸部近くで凸帯をめぐらす。口頸部中位にもう一条凸帯をめぐらせ、凸縁で界された波状文からなる文様帯を施す。

SD 1 出土の(13・14)は、土師質の上釜である。口縁部は、外反し外上方へ伸びる。(14)は内面、外面ともに板ナデによる調整が施されている。(13)は、磨耗が著しいため、調整は不明だが、羽根から口縁の屈曲部までユビオサエによる指頭圧痕が目立つ。羽根はいずれも水平に外側へ伸びる。

SR 1 出土の(16)は、瓦器碗である。口径約15cm強、器高5cmを呈す。底部から口縁部にかけて外反しながら立ち上がり、口縁部付近に横ナデが強く施されている。内外面の磨耗が著しく、ヘラミガキの様相は不明であるが、外面は指頭圧痕が目立つ。高台は断面台形状をなし、立ち上がりは低い。口径は歪みがあるため、法量の信頼性は薄い。外面調整の荒さや高台の形骸化などを踏まえると和泉型瓦器碗Ⅲ期後半に属するものと考えられる。

SR 1 出土の(17)は、瓦器碗の高台である。断面台形状をなし、高台高は0.5cm程度である。見込み部分のヘラミガキなどは確認できない。先述した(16)とほぼ同時期のものと考えられる。

SR 1 出土の(15)は、土師質土器の皿である。復元できる法量は、口径8cm、器高1.3cmである。外面の色は乳白色を呈している。全体的に器壁が厚く、内面の底部から口縁にかけての立ち上がりは明瞭ではない。

4 まとめ

本次調査区では、これまで確認されていなかった古墳時代の遺構と隣接する1988年度の(財)大阪府埋蔵文化財協会による調査によって確認された中世遺構と関連する遺構が検出された。以下、各時代の概要を述べまとめとした。

・古墳時代

古墳時代の遺構は、復元段階では掘立柱建物5棟、竪穴住居と思われる遺構1棟、その他ピット、土坑が多数検出された。これらの遺構は調査区の南側よりに集中し、北側にはそれほど多く分布しない。これは、後世の自然河川の氾濫により削平された可能性もあるが、隣接する既往の調査において包含層出土遺物にはTK 209型式(中村編年Ⅱ-5段階)

の坏身がみられるが、遺構は不明であることから、遺構の分布は本次調査区を北限として南側に展開していたものと考えられる。所属時期として、TK208(同I-2)のものと6世紀(TK10)のものに分けられるが、多くの遺構が緻密にこの時期に該当するものであるかどうかは出土遺物が全体的に少量であるため判断できない。しかし、古墳時代中期の遺跡が数少ない当該地域において、本次調査区の成果は市域における古墳時代の様相を探る上で重要な位置であろう。

調査区周辺を踏まえると調査区の北側約1km先には塚穴古墳がある。塚穴古墳は横穴式石室で、时期的にはほぼ同時期であり、本次調査区で確認した集落との関係が想定される。また、調査区約100m東側に、地元の話では「塚」と呼ばれている高さ1m強のマウンドがある。この「塚」が中世以降の塚である可能性は十分に考えられるが、担当者がこのマウンドを踏査したところ、6世紀後半に該当する須恵器の坏身を採集した。現在このマウンドの大半は削平されており、過去に付近の調査を行った際も古墳時代に該当する遺物は出土しなかったことから、古墳であると即断できないが、古墳である可能性を指摘しておきたい。

・中世

出土遺物から概ね13世紀前半頃のものと考えられるが、既往の隣接する調査区や、用水施設から出土した土師器の土釜から12世紀段階から継続する集落であると考えられる。また、包含層からの出土であるが、逆三角形の外側に張り出す形の高台をもつ瓦器塚を確認しており、周辺には12世紀代の集落が存在していた可能性が高い。

先述した土塚墓は、掘立柱建物とほぼ同時期であり、建物と隣接する箇所に設けられていることから、屋敷墓である可能性がある。市域内で確認されている屋敷墓は三日市遺跡^(註1)、大日寺遺跡^(註2)、隣接する調査区で検出された高向遺跡^(註3)の3遺跡である。高向遺跡では、これが2例目である。本次調査区の土葬墓は、木棺の下に砂を敷いている痕跡があり、葬送儀礼、もしくは造墓形態を考える上で貴重な成果であると言える。

水利施設は、溝の方向が中世の前半段階に構築されたと考えられる丹保池に向かっていくことなどから、水田の付属施設としての用水路であると考えたい。ただ、先述したようにその具体的な機能と役割は、本次調査で明確化することは出来ず、今後の成果を待ちたい。また、本次調査区は、中世「高向庄」と「上原領」との境目に位置し、領域の境目に位置する特有の水利管理施設であったことは十分に考えられる。

高向遺跡における中世の様相は既往の調査を含めてもおおよそ13世紀前半頃で終焉を向かえる。市域の中世遺跡は13世紀中頃以降、つまり和泉型瓦器塚Ⅳ期を中心に展開するものが多く、高向遺跡の北側に位置する上原遺跡や上原北遺跡でも和泉型瓦器塚Ⅳ期から集落が展開する。これらは、それぞれ一般的資料に見られる「高向庄」・「上原領」に該当すると考えられるが、本次調査区で検出した水利施設と丹保池との関係は、石川左岸中位段

丘上における土地開発・集落の展開を解明する上で欠かせない事例である。 (藤田)

(註1) 『三田市遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 1988年10月 三田市遺跡調査会

(註2) 『河内長野市遺跡調査報告Ⅳ 大日寺道跡』 2001年3月

河内長野市教育委員会 河内長野市遺跡調査会

(註3) 『(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第40輯 高向道跡』 1989

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

第2節 清水遺跡(SMZ02-3)



第22図 調査区位置図(1/3000)

1 概略

当該遺跡は、天見川右岸の標高約180mに位置し、行政上は岩瀬に所在する。遺跡の西側には高野街道が通る。観心寺七郷の一つ「下岩瀬」と考えられる。既往の調査はいずれも、小規模な調査であるが、主に15世紀代の耕作地と考えられる痕跡が検出されている。

2 調査の方法と層序

調査は12m×6.5mの調査区を設定しておこなった。

基本層序は、耕作土、床土、包含層である。また、調査区の北側の一部は、整地層と考えられる地山ブロックを含む層がある。

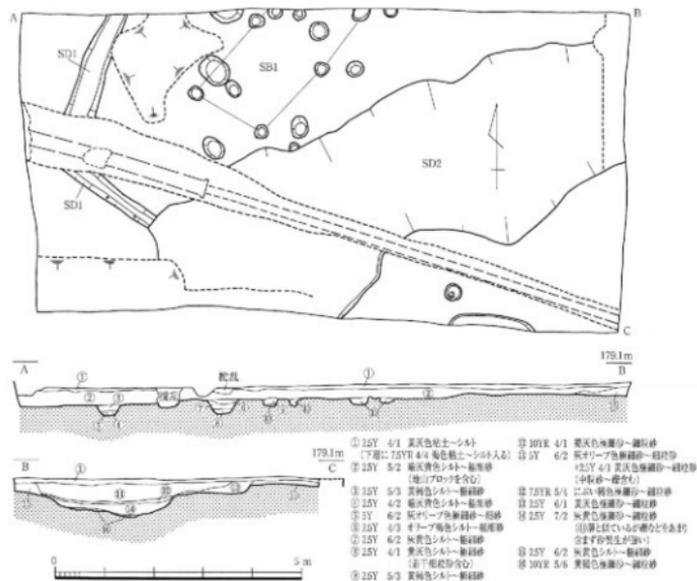
3 遺構と遺物

(1) 掘立柱建物

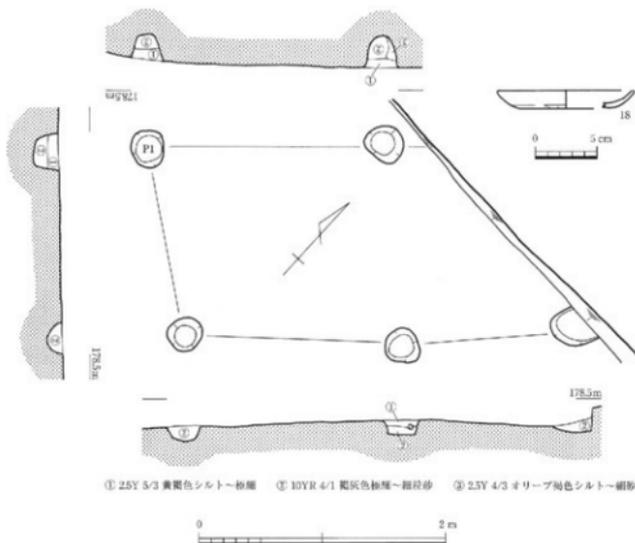
[SB1] (第24図、図版7)

いずれの遺構も断面観察から明確に柱穴の痕跡を示すものはなかったが、その配置や、出土遺物から区画溝とほぼ同時期のものであると考えられる。

遺物は瓦器塊、P1から土師質皿(18)が出土したが、(18)以外は細片のため図示できなかった。



第23図 遺構配置図(1/100)及び土層断面実測図(1/100)



第24図 S B 1 遺構実測図(1/40)及び P 1 出土遺物実測図

(2) 区画溝、溝

〔SD1〕(第25図、図版10)

調査区の西側で区画溝と思われる溝を検出した。

遺物は、土師質の皿(19)、瓦器の皿(20)・境、瓦質の皿(21)、龍泉窯系青磁碗



第25図 SD1 出土遺物実測図

(22)、陶器の皿(23)が出土している。出土遺物はいずれも細片のため時期の特定は困難であるが、瓦器境の外側・内面ともにヘラミガキの痕跡が見られないことや、焼きが甘く炭素付着が完全ではないこと、天野山金剛寺遺跡から出土する瓦器境との比較などから概ね尾上編年のⅣ期後半に該当するものと思われ、時期は14世紀前半頃と考えられる。

〔SD2〕

調査区の東側から南西側に横断する。幅約1.5m、深さ約0.8mであるが、掘削深度が基礎工事による深度を大幅に越えるため、調査区壁面側にトレンチを設定し、遺構深度を確認した。この溝は、前述した区画溝やピットを切っており、また整地層の上面から掘削が行われている。埋土の大半は、礫やブロック状の堆積であり、人為的に埋められたと考えられるが、最下層の一部に粘土質や砂質の堆積が見られ、一定期間帯水状況にあったと考えられる。

出土遺物は、瓦質の甕があるが、細片のため図示できなかった。15世紀代の所産と考えられる。

4 まとめ

本次調査区は、狭小の範囲であったものの当該地域における中世集落の様相を考える上で重要な成果があった。以下、本次調査の成果を文献資料と照らし合わせて検討し、まとめとしたい。

当該地周辺は、観心寺七郷の一つ「下岩瀬」に肯定されるが、文献⁽²¹⁾によれば「下岩瀬」と「上岩瀬郷」が分かれるのは14世紀後半からの事であり、それ以前は、両郷合わせた「岩瀬郷」であったことが確認できる。既往の調査において、岩瀬北遺跡から、「岩瀬郷」時代の集落が確認されている。その成果を見ると、概ね12～14世紀の建物群であり、いわゆる「下岩瀬」の時期までは下らない。本次調査は、出土遺物の残りが悪いために明確な時期を示すのは避けるが、区画溝を伴った集落が「岩瀬郷」時代のものであり、大きな溝が「下岩瀬郷」であったことを想定できる。さて、「岩瀬郷」・「下岩瀬郷」の両時代ともに、観心寺が領下職として文献資料に現れる。15世紀代には、用水工事を指示していたことが伺え、本次調査区で検出された溝もその一つであったと考えられる。現在の用水路を見てみると、調査区東側から調査区内の土管を通して西側に流れている。調査区内の土管は、現在の土地利用に合わせて設けられたと考えられ、今回検出した溝は、調査区東

西に見られる用水路の方向と一致する。このような状況から、現在当該地域周辺の用水路は、本次調査区内の土管のように近年の土地利用にあわせたものが一部見られるものの、溝が作られた時期つまり14世紀後半～15世紀前半にその端緒がみられると考えることが出来る。「岩瀬郷」から「下岩瀬郷」への変遷が区画溝をもつ屋敷地の廃墟→整地→用水路という図式が描けるとすれば、今後の中世前期から後期への変遷を考える上で重要な成果があったと考える。

(藤田)

(註1)『河内長野市史 第四巻 史料編一』河内長野市

第3節 野作遺跡(NSK03-1)



第26図 調査区位置図(1/3000)

1 概略

野作遺跡は石川左岸の低位段丘上に位置し、標高は約130mを測る。当遺跡の既往調査では調査区西側の隣地で中世の土坑、ピットを検出している⁽²⁶⁾。

本次調査は個人住宅の建築に先立ち、建物の基礎工事の切土で影響を受ける範囲について調査区を設定し、実施した。調査面積は約8㎡である。

2 調査の方法と層序

調査は5m×1.5mの調査区を1カ所設定して実施した。

基本層序は、表土(層厚0.1m)、盛土(同0.4m)、旧耕土(同0.1m)、2.5Y7/1灰白礫泥じり細砂(同0.05m)、旧床土(同0.05m)であった。

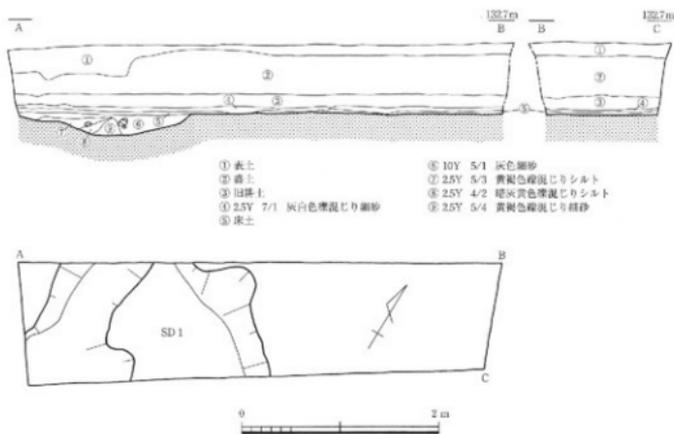
3 遺構と遺物

遺構は溝を1カ所検出した。遺物は出土しなかったが、層序から中世ないし近世の遺構と見られる。

・溝

[SD1]

SD1は調査区の南側で検出した。遺構の両端は調査区外に及ぶため詳細は不明であ



第27図 遺構配置図(1/50)及び土層断面実測図(1/50)

る。検出した遺構の規模は長さ1.2m、北西側の幅1.35m、南東側の幅2.52m、深さ0.36mを測り、軸方向はN-42°-Wである。

遺物は出土しなかった。

4 まとめ

調査の結果、調査区が狭小であり、また遺構も部分的な検出にとどまっている。さらに出土遺物がないため、当該地の遺構の詳細は不明である。

今後、遺跡内の周辺地域の調査成果が期待される。

(鳥羽)

(註1) [河内長野市埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 野作遺跡] 1992年3月 河内長野市教育委員会

第4節 膳所藩代官所跡(ZZH03-1)



第28図 調査区位置図(1/3000)

1 概略

膳所藩代官所跡は西高野街道の東沿いに位置し、標高は約120mを測る。当遺跡の既往調査では近世の土坑が検出されている⁽⁸¹⁾。

本次調査は個人住宅の建築に先立ち、建物の基礎工事の切土で影響を受ける範囲について確認調査区を設定し、実施した。調査面積は約4㎡である。

2 調査の方法と層序

調査は東西約2m×南北約2mの調査区を1カ所設定して、おこなった。

調査方法は作業員により人力掘削、精査、遺構検出、遺構掘削作業を行った。

基本層序は表土(層厚0.1m)、褐色礫泥じり粗砂(同0.18m)で、地山は黄褐色礫泥じりシルトであった。



調査区全景

3 遺構と遺物

遺構は近世の石垣を検出した。

・石垣

[SW1]

SW1は調査区の北東隅で検出した。遺構の両端は調査区外に及ぶため詳細は不明である。遺構の規模は、長さ1.33m、幅0.9m、高さ0.7mである。石垣の石は川原石が中心に使用され、規模は最大34cm×20cm×18cmを測る。

遺物は石垣の裏込から鎌倉時代の瓦質土釜、近世の瓦が出土したが、細片のため図示できなかった。

4 まとめ

調査の結果、調査区が狭小で、また検出遺構も部分的なため当該地の遺構の詳細は不明である。

今後、遺跡内の周辺地域の調査成果が期待される。

(鳥羽)

(註1) 『河内長野市埋蔵文化財調査報告書ⅢⅣ 官山遺跡 西之山遺跡 岩澤寺遺跡 膳所藩代官所跡』

1998年3月 河内長野市教育委員会

第5節 烏帽子形城跡(EBS03-3)



第29図 調査区位置図(1/3000)

1 概略

烏帽子形城跡は金剛葛城山系から北側に派生する丘陵上に位置し、遺跡の東側には天見川、西側には石川に挟まれ、両川は遺跡の北側で合流する地形を呈している。また山の東側裾部には高野街道が通っている。標高は約117mを測る。

既往調査では、山頂の城郭の中心部で中世の礎石建物、山の東側周辺部では中世の土坑、ピットなどが検出されている^(B1)。

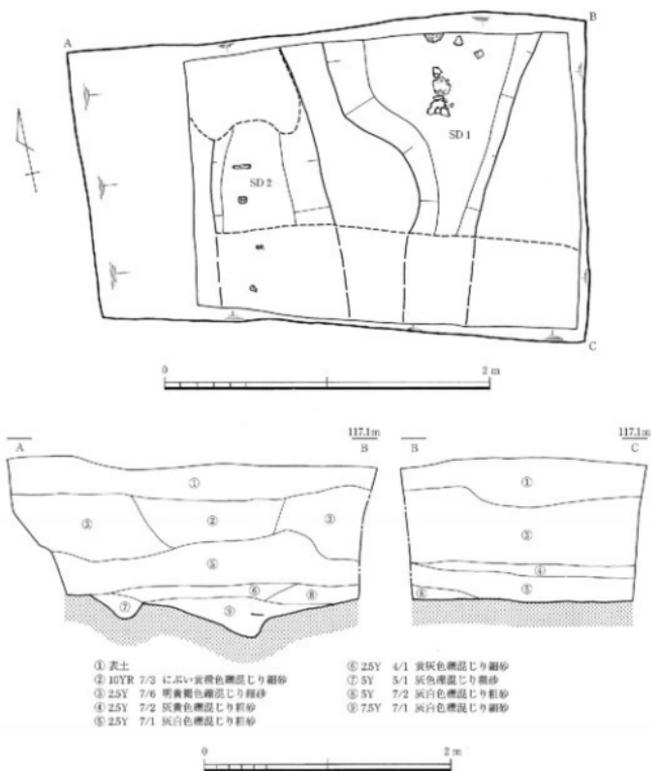
本次調査は個人住宅の建築に先立ち、建物の基礎工事の切土で影響を受ける範囲について調査区を設定し、実施した。調査面積は約7㎡である。

2 調査の方法と層序

調査は東西3.1m×南北2.2mの調査区を1カ所設定して実施した。

調査方法はバックフォーによる機械掘削を行った後、作業員により人力掘削、精査、遺構検出、遺構掘削作業を行い、調査補助員により平板測量、遺構平面実測、断面実測を行った。

基本層序は表土(層厚約0.4m)、2.5Y 7/6 明黄褐色礫混じり細砂(同約0.45m)、2.5YR 7/2 灰黄色礫混じり粗砂(同約0.1m)、2.5Y 7/1 灰白色礫混じり粗砂(同約0.2m)であった。地山は10YR 7/1 灰白色礫混じり細砂であった。



第30図 遺構配置図(1/30)及び土層断面実測図(1/40)

3 遺構と遺物

遺構は古墳時代の溝、近世の溝を検出した。

・溝

[SD1] (第31図、図版10)

SD1は調査区の東側で検出した。遺構の両端は調査区外に及ぶため詳細は不明である。遺構の規模は、検出長1.8m、北側の幅1.36m、南側の幅0.38m、深さ0.13mである。軸方向はN-11°-Eである。

遺物は古墳時代の須恵器の坏壺(24)・坏身(25)・短頸壺(26)、土師器の鉢(27)が出土した。

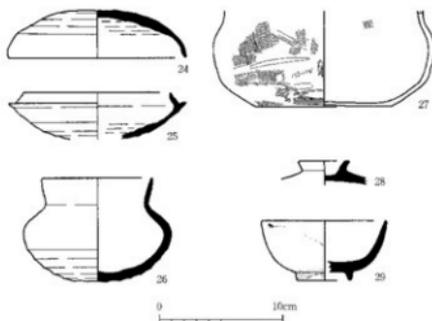
[SD 2]

SD 2は調査区の西側で検出した。遺構の両端は調査区外に及ぶため詳細は不明である。遺構の規模は、検出長1.65m、北側の幅0.6m、南側の幅0.77m、深さ0.13mである。軸方向はN-4°-Eである。

溝は木杭列を伴い、杭は4本確認された。木杭の間隔は0.2~0.3mであった。検出した層

序と木杭の残存状況、また出土遺物から近世の遺構とみられる。

遺物は細片のため図示できなかった。



第31図 SD 1・包含層出土遺物実測図

・包含層(第31図、図版10)

遺物は陶器の蓋(28)、磁器の碗(29)が出土した。

4 まとめ

調査の結果、近世のSD 2の軸方向はほぼ高野街道と平行することから、道路軸に影響を受けて構築されたと考えられる。

古墳時代のSD 1は、烏帽子形城跡の東側の裾部、つまり高野街道の東側に同時期の遺構が周辺地域に分布することを示唆するものとして、今後の調査の指針として貴重な成果が得られた。(鳥羽)

(註1)『河内長野市遺跡調査会報1』 1989年3月 河内長野市遺跡調査会

圖

版



調査区全景 (北から)



第1調査区全景 (北から)



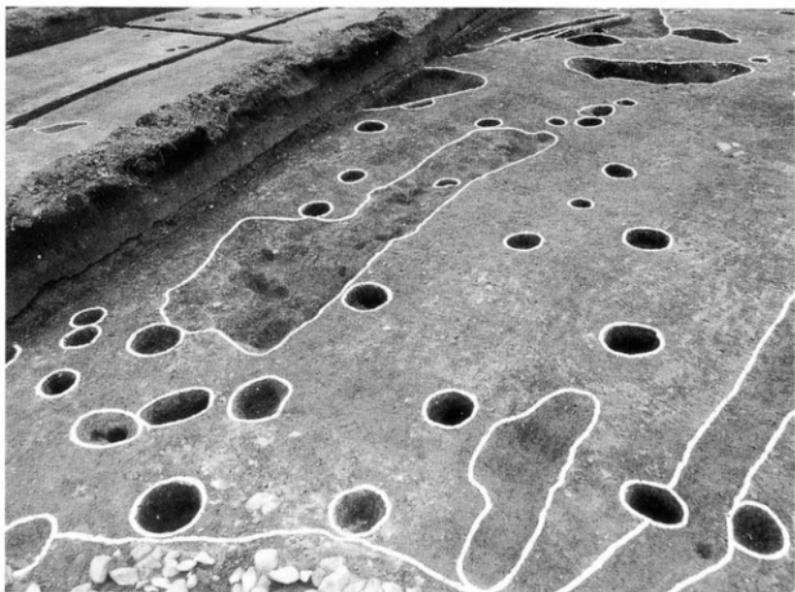
第2調査区全景 (南から)



第3調査区全景 (南から)



第3調査区全景 (北から)



SB4・5 (北から)



SD1 (西から)



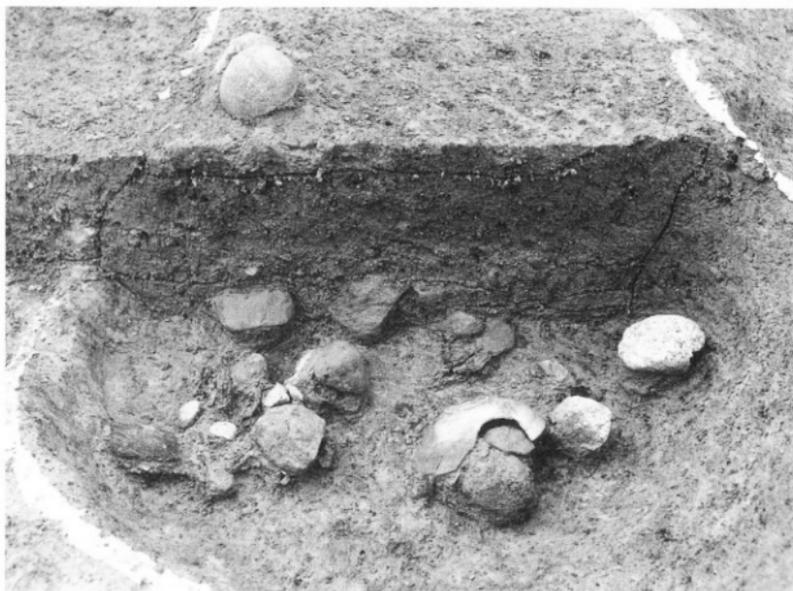
SD1 (北から)



遺物出土状況 (西から)



SK 6 (西から)



SR1 (東から)



SY1 (南から)



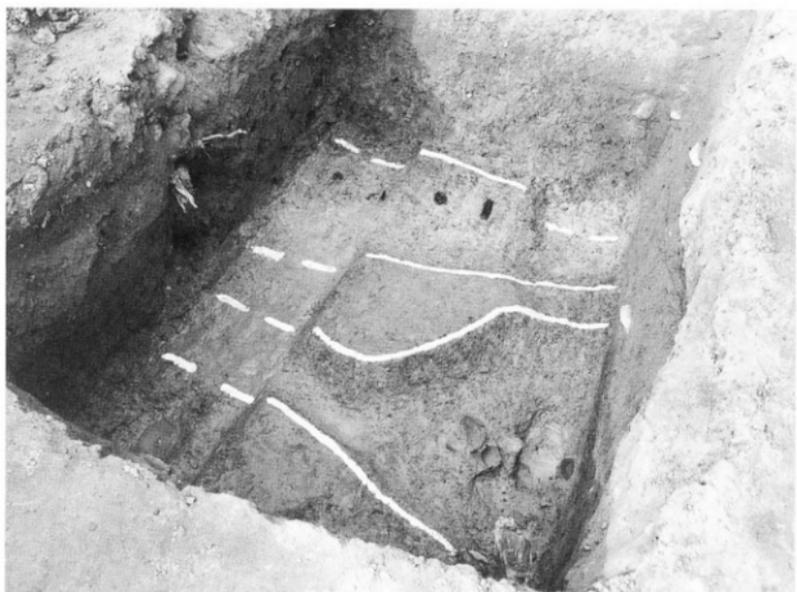
調査区全景 (東から)



S B 1 (南から)



NSK03-1 調査区全景 (東から)



EBS03-3 調査区全景 (東から)



1



10



2



5



3



11



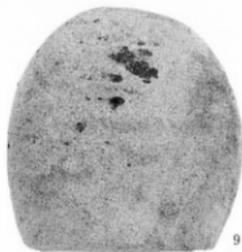
6



7



12



9



8

TK001-2 SK3 (1~3), SK5 (5~9), SK6 (10~12)



16



13



14



19



20



21



22



23



26



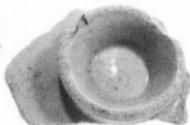
24



27



25



28



29

TKO01-2 SD1 (13·14), SR1 (16), SMZ.02-3 SD1 (19~23),
EBS03-3 SD1 (24~27)、包含層 (28·29)

報 告 書 抄 録

ふりがな	かわちながのしまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	河内長野市埋蔵文化財調査報告書
副書名	高向遺跡・清水遺跡・野作遺跡・膳所藩代官所跡・烏帽子形城跡
巻次	ⅩⅩ
シリーズ名	河内長野市文化財調査報告書
シリーズ番号	第39輯
編著者名	鳥羽正剛・藤口徹也
編集機関	河内長野市教育委員会
所在地	〒586-8501 大阪府河内長野市原町396-3 TEL.0721-53-1111
発行年月日	2004年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード			調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡	北緯 東経			
高向遺跡 (TKO01-2)	大阪府 河内長野市 高向	27216	府 23 河 19	34°26'00" 135°32'56"	H13.12.18) H14.3.26	約2,000㎡	老人福祉施設
清水遺跡 (SMZ02-3)	大阪府 河内長野市 岩瀬	27216	府 35 河 31	34°24'39" 135°35'30"	H15.1.14) H15.1.22	約78㎡	倉庫
野作遺跡 (NSK03-1)	大阪府 河内長野市 野作町	27216	府140 河107	34°26'51" 135°33'20"	H15.7.8) H15.7.10	約8㎡	個人住宅
膳所藩代官所跡 (ZZH03-1)	大阪府 河内長野市 古野町	27216	府 63 河 52	34°27'07" 135°34'24"	H15.9.8) H15.9.19	約4㎡	個人住宅
烏帽子形城跡 (EBS03-3)	大阪府 河内長野市 喜多町	27216	府 24 河 20	34°26'27" 135°34'11"	H15.11.17) H15.11.19	約7㎡	個人住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高向遺跡	集落	古墳 中世	掘立柱建物 溝 土坑	須恵器 瓦器 土師質土器	用水施設を検出
清水遺跡		中世	掘立柱建物 溝	瓦器・瓦質土器 土師質土器 青磁	
野作遺跡		中世 ないし 近世	溝		
膳所藩代官所跡	城館	近世	石垣	瓦質土器 瓦	
烏帽子形城跡		古墳 近世	溝	須恵器・土師器 磁器・陶器	

河内長野市文化財調査報告書第39輯
河内長野市埋蔵文化財調査報告書XX

2004年3月31日発行

発 行 大阪府河内長野市原町396-3
河内長野市教育委員会
0721-53-1111
印 刷 (株)中島弘文堂印刷所
